

看護学科におけるカリキュラムの評価

— 4年間の学生アンケート結果から —

2015～2019年度 看護学科教務委員会
豊橋創造大学 保健医療学部看護学科

抄録

本学科では、2015年にカリキュラム改正を行い、学生によるカリキュラム評価アンケートを継続して実施した。今回、本学科のアセスメントポリシーをふまえ、カリキュラム運用及びディプロマポリシー（以下DP）の到達状況に焦点をあて、評価結果を報告する。対象者は2015～2018年度入学生で、分析は、各年次の「科目数のバランス」「科目の順序性」「時間割に問題があったか」の3項目、2015年度入学生のDP到達度推移について行った。結果、1年次と2年次では科目数のバランスに改善の余地があると回答した割合が約3割と他年次に比べ高かった。科目の順序性は全年次で約8割が、よいと回答した。2015年度入学生のDP到達度は年次が進むにつれて増加したが、【社会的貢献】【研究力】【イノベーション】の到達度は7割程度であった。カリキュラム全体の順序性はよいと考えるが、科目数のバランスに一部課題があることが明らかとなった。

キーワード (Key Word)

看護カリキュラム (Nursing Curriculum), カリキュラム評価 (Curriculum Evaluation),
ディプロマポリシー (Diploma Policy)

I. はじめに

中央教育審議会の大学教育の質的転換に向けた答申（2012）では、学士課程教育をプログラムとして充実させるためには、教育成果をプログラム共通の考え方や尺度（アセスメントポリシー）に則って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるという改革サイクルの定着を必要としている。また、教員が組織的な教育に参画し、プログラム自体の評価を行うという一貫性・体系性の確立の重要性を述べている。

さらに、国内の看護学教育も多様な変革がみられている。2017年に文部科学省より、保健師・助産師・看護師課程に共通して必要な教育内容が、コアとして抽出された。この内容は各大学におけるカリキュラム作成の参考となる学修目標を列挙した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」として出された（文部科学省，2017）。2018年には高等教育機関の分野別評価として

看護学分野の評価・認証を行う日本看護学教育評価機構が発足している。2019年には厚生労働省の看護基礎教育検討会より、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正案が提言されている（厚生労働省，2019）。この指定規則の改正案については、文部科学省の大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会でも、論議がされている（文部科学省，2019）。

このような教育の変革が求められる昨今、本学保健医療学部看護学科（以下、本学科）では、地域や本学としてのニーズに応えること、看護学教育の質向上などをねらいとしたカリキュラム改正を2015年度入学生からの施行にむけて行った（大島ら，2016）。このカリキュラム改正時には、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー（以下DP）等の再検討を行った。さらに、この改正を契機に、カリキュラム評価の実施（五十嵐ら，2017；蒔田ら，2017）や、アセスメントポリシーの策定（蒔田ら，2018）を継続的に行い、教育成果の評価システムを構築し、改革サイクルを定着させ、教育の質向上と質保証に取り組んでいる。

教育の内部質保証に関するガイドライン（大学改革支援・学位授与機構，2017）では、教育プログラムの点検・評価について、教育目標を達成するよう、カリキュラムが教育内容や方法の面で適切に構成されているか検討を行うことが必要であると述べている。また、田島（2009）は看護学の教育内容は看護実践を中心とした内容となり、それが効果的に教授—学修できるためには、教育方法及び教育評価が密接に関連するとしている。さらに、教育課程の評価は、教育課程の作成段階、教育実施段階などの時期、また在学生、卒業生、教育者などの多様な視点で、計画的に行う必要性があるとも述べている。これらのことから、改正したカリキュラムが教育目標を達成できるものであるか評価することが必要であり、評価の際には看護学教育の特徴をふまえたうえで、様々な視点から行うことが必要である。

本学科では、学生によるカリキュラム評価アンケートを毎年度実施し、4年間の結果が集積された。そこで今回、本学科のアセスメントポリシーをふまえ、カリキュラムの運用及びDPの到達状況に焦点をあて、アンケート結果を整理・分析し、報告する。本報告の内容は、今後のカリキュラム改正の検討に向けた資料になると考える。また、他学においても、教育の質向上に向けたPDCAサイクルを循環させる実践例として役立つ可能性があると考えられる。

II. 目的

今後のカリキュラム構築の検討にむけた基礎資料とするために、学生によるカリキュラム評価アンケートから、2015年度改正カリキュラムのカリキュラム運用及びDPの到達度を明らかにする。

III. 方法

1. 対象者

2015年度改正カリキュラムが適用されている2015～2018年度入学生で、アンケート結果の公表の同意の得られた学生を対象とした。

- 1) 2015 年度入学生：1 年次，2 年次，3 年次，4 年次の学生
- 2) 2016 年度入学生：1 年次，2 年次，3 年次の学生
- 3) 2017 年度入学生：1 年次，2 年次の学生
- 4) 2018 年度入学生：1 年次の学生

2. 評価方法

1) 実施時期

2016～2019 年の 3 月または 4 月で，毎年各学年が終了した時期に全学生に対してカリキュラム評価アンケートを実施した。1 年次～3 年次の内容についてのアンケートは，春学期ガイダンス時に実施した。4 年次の内容についてのアンケートは，2 月の 4 年生が全員集まる集合日に実施した。つまり，2015 年度入学生 4 回，2016 年度入学生 3 回，2017 年度入学生 2 回，2018 年度入学生 1 回となった。

2) 実施方法

アンケートはマークシートを用いた集合調査で行った。

3) カリキュラム評価アンケートの評価項目

カリキュラム評価アンケートの評価項目は，蒔田ら（2017）が本学科のカリキュラム評価で報告した内容を参考に作成した。評価項目は「各年次の授業科目について（科目数のバランス，科目の順序性，時間割に問題があるか，など）」と「7 つの DP の到達度評価」とした。7 つの DP は【対象理解】【倫理性】【看護実践力】【社会的貢献】【研究力】【イノベーション】【協調性】である。さらに，4 年次のみは「卒業時の不安（看護技術，看護の知識，看護実践力）」と「4 年間で自身が成長・変化したか」の内容を追加した。

評価項目の評価は，4 件法あるいは 2 件法で行った。また，各評価内容について，自由記載欄を設けた。

3. 集計・分析方法

1) 集計方法

本報告の目的にあわせて，カリキュラム評価アンケートの評価項目のうち，下記に述べる項目のデータについて集計した。

(1) カリキュラム運用について

カリキュラム運用について評価するために，カリキュラム評価アンケートの「科目数のバランス」「科目の順序性」「時間割に問題があるか」の項目について 4 年間分を横断的に単純集計した。集計に際して，自由記載は記述された内容ごとに 1 件とした。

(2) DP の到達度について

DP 到達度についての年次推移を確認するために，2015 年度入学生の 1 年次～4 年次までのカリキュラム評価アンケートの「7 つの DP の到達度評価」の項目について縦断的に単純集計した。

2) 分析方法

(1) カリキュラム運用について

各年次の「科目数のバランス」「科目の順序性」「時間割に問題があるか」の各項目の回答結果から、各年次での科目配置、時間数の現状と課題について横断的に分析を行った。自由記載の内容は、類似している内容をカテゴリーとしてまとめ、各項目における具体的な課題について分析した。他に類似するものがない自由記載については、《その他》のカテゴリーにまとめた。

(2) DP の到達度について

2015 年入学生の DP 到達度の年次推移から、DP に到達することができるカリキュラムであるかについて縦断的に分析を行った。

4. 倫理的配慮

1) 本研究への協力について

アンケート実施前に、カリキュラム評価には、学生からの建設的な意見が重要であり、教育にも反映させていくために必要であることを学生に説明したうえで、協力を依頼した。

2) 対象者の自由意思の尊重、匿名性の確保

対象者には、回答したくない項目については、回答しなくてよいことを説明した。また、回答内容は成績・評価に一切関係しないことを説明した。マークシートの回収は、誰が回答していないかがわからないよう配慮し、回答されていないものも含めて全員よりその場で回収した。マークシートは学生個人が特定されないよう配慮して無記名とした。

3) 結果の公表について

回答の結果については、報告書および学会等で発表することがあることを説明し、結果の公表に対して同意ができない場合は、同意しない意思を記載するチェック欄を設けた。結果の公表に同意しない学生の回答については、本報告の結果から除外した。

IV. 結果

結果の記述に際して、カテゴリーは《 》、具体的な記載内容は〈 〉で示す。

1. アンケート回答数 (表1)

2015 年度から 2018 年度の期間で実施したアンケートは、学生全員にアンケートを配布し、アンケート結果の公表に同意が得られた回答の回答率は全て 87.5% 以上であった。

表1. アンケート配布数と回答数

評価年度	対象学生	人 (%)			
		2015年度 入学生	2016年度 入学生	2017年度 入学生	2018年度 入学生
2015年度	配布数	82			
	回答数	75 (91.5%)			
2016年度	配布数	85	89		
	回答数	80 (94.1%)	79 (88.8%)		
2017年度	配布数	78	82	100	
	回答数	73 (93.6%)	72 (87.8%)	90 (90.0%)	
2018年度	配布数	78	75	96	87
	回答数	71 (91.0%)	71 (94.7%)	84 (87.5%)	80 (92.0%)

※回答数はアンケートの結果の公表に同意が得られた回答の数

2. 各年次の「科目数のバランス」「科目の順序性」「時間割に問題があるか」の結果

1) 科目数のバランス

(1) 1年次 (図1)

1年次の科目数のバランスについて「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生 34.6%, 2016年度入学生 40.5%, 2017年度入学生 30.0%, 2018年度入学生 36.3%であった。自由記載は55件あり,《秋学期に科目数が多く偏っている》が38件と一番多かった。次に,《バランスはよかった》が9件,《日々の時間割に偏りができている》が6件であった。《その他》は2件であった。

(2) 2年次 (図2)

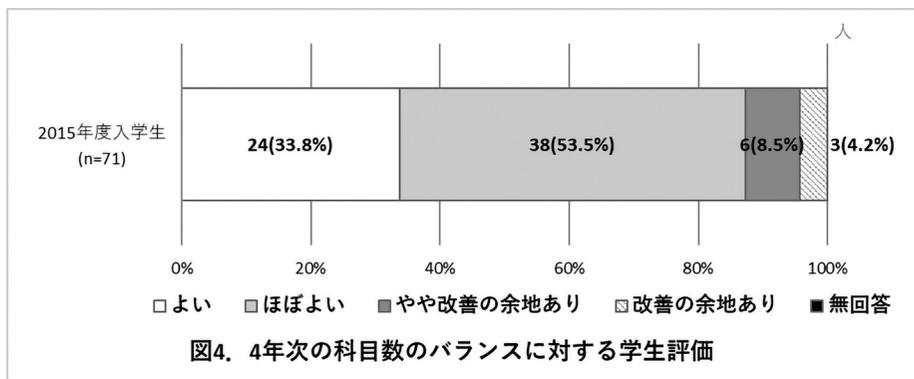
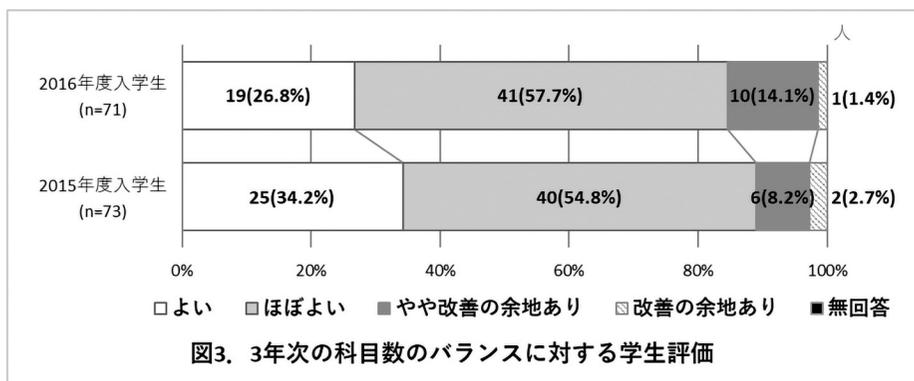
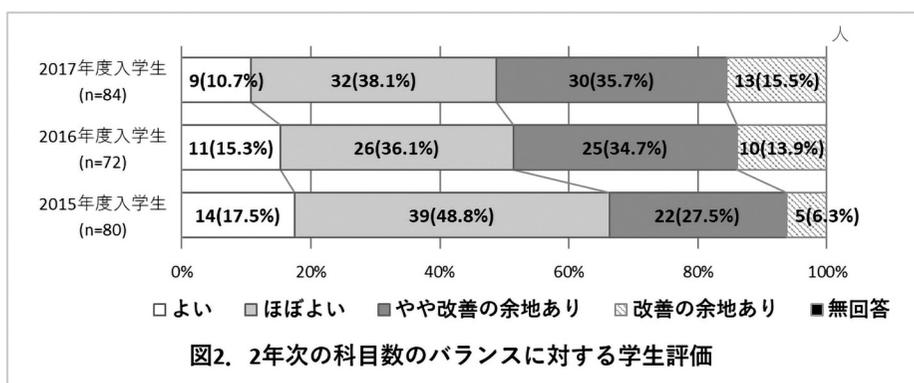
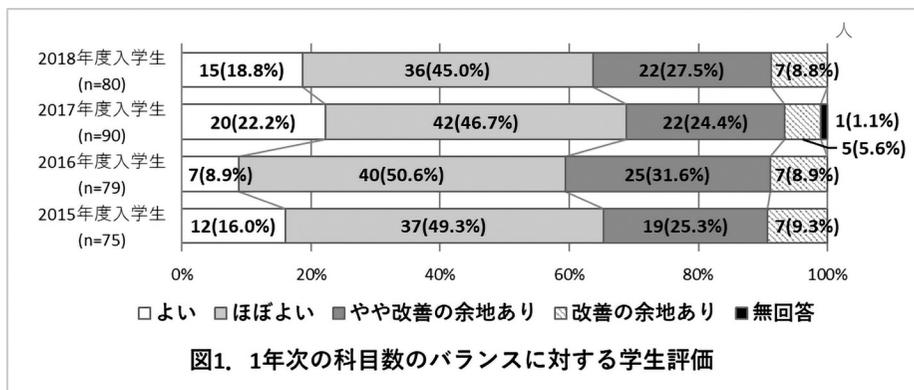
2年次の科目数のバランスについて,「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生 33.8%, 2016年度入学生 48.6%, 2017年度入学生 51.2%であった。自由記載は33件あり,《春学期に科目数が多く偏っている》が29件と一番多かった。他に《科目数が多く学修時間の確保が難しい》が2件であった。《その他》は2件であった。

(3) 3年次 (図3)

3年次の科目数のバランスについて,「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生 10.9%, 2016年度入学生 15.5%であった。自由記載は6件あり,《バランスはよい》が2件であった。《その他》が4件であった。

(4) 4年次 (図4)

4年次の科目数のバランスについて,「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生 12.7%であった。自由記載は《その他》2件であった。



2) 科目の順序性

(1) 1年次 (図5)

1年次の科目の順序性について「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生6.6%、2016年度入学生19.0%、2017年度入学生17.8%、2018年度入学生11.3%であった。自由記載は17件あり、《科目の順序性はよい》が7件と一番多かった。次に、《病態と治療に関する科目の順序に改善が必要》が5件であった。《病態と治療に関する科目の順序に改善が必要》の内容としては〈からだの構造と機能がすべて終わってから病態と治療が始まるのがよい〉や〈病態と治療の内科系と基礎が基礎を習うのが後になる部分もあり難しかった〉などであった。《その他》は5件であった。

(2) 2年次 (図6)

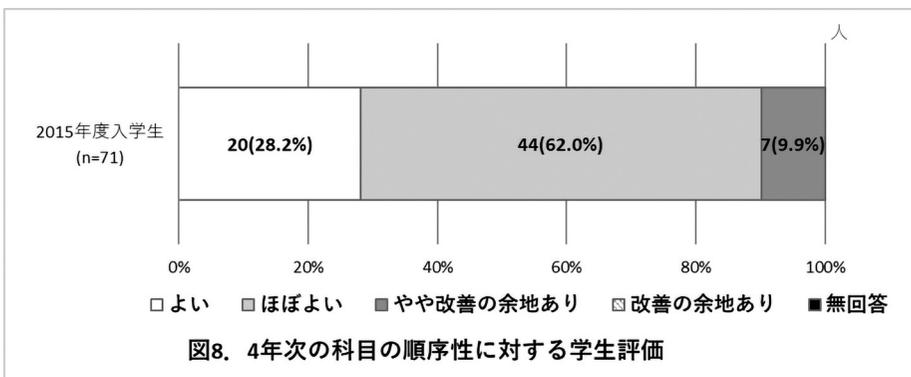
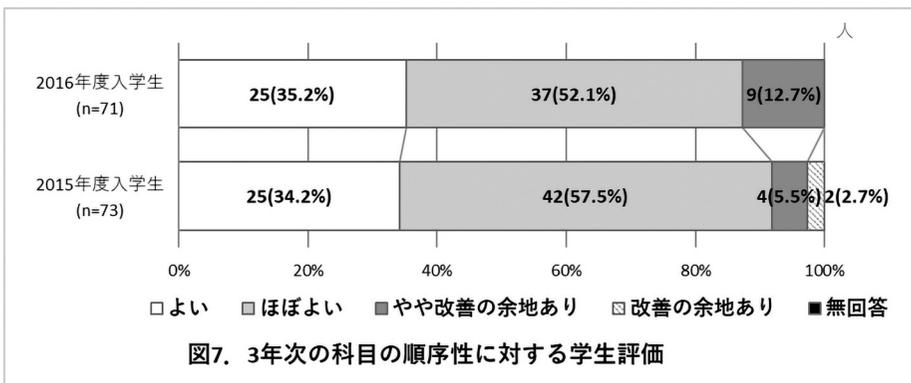
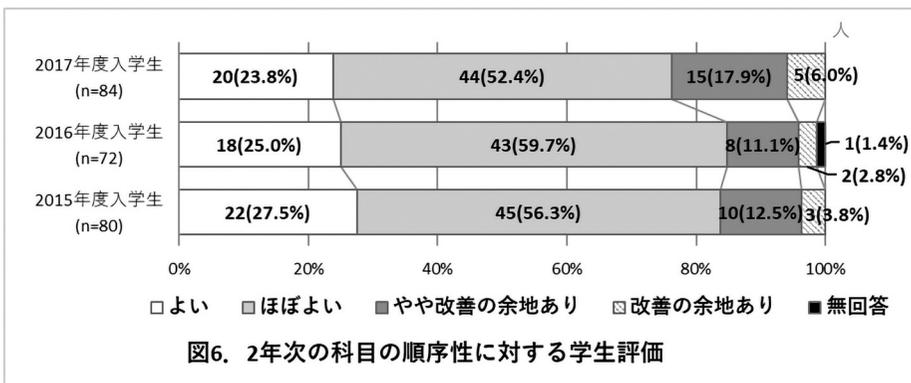
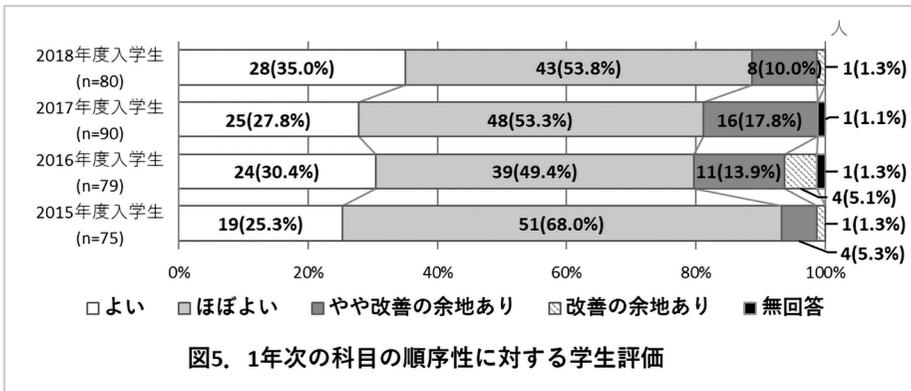
2年次の科目の順序性については、「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生16.3%、2016年度入学生13.9%、2017年度入学生23.9%であった。自由記載は《その他》が3件であった。

(3) 3年次 (図7)

3年次の科目の順序性について、「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生8.2%、2016年度入学生12.7%であった。自由記載は7件あり、《順序性はよかった》が3件、《看護管理学を選択コース開始前に履修したい》が2件であった。《看護管理学を選択コース開始前に履修したい》は選択コースの学生が3年次に履修する助産管理、公衆衛生看護管理システム論の前に4年次におかれている看護管理学を履修したいという内容であった。《その他》が2件であった。

(4) 4年次 (図8)

4年次の科目の順序性について、「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」を合わせた割合は2015年度入学生9.9%であった。自由記載はなかった。



3) 時間割に問題があるか

(1) 1年次 (図9)

1年次の時間割に問題があるかについて、「ある」と回答した割合は2015年度入学生36.0%, 2016年度入学生51.9%, 2017年度入学生30.0%, 2018年度入学生40.0%であった。自由記載は43件あり, 《空きコマが多い曜日・日がある》が15件と一番多かった。次に, 《春学期に比べて秋学期の時間割が過密》が10件, 《履修者のグループ分けによる不利益》が6件, 《問題はなかった》が4件, 《時間割の都合で希望の科目が履修できない》が2件, 《教室移動が大変》が2件, 《時間割がわかりにくい》が2件であった。《履修者のグループ分けによる不利益》の内容としては〈学籍番号によって科目が分割されその関係で受けられない選択科目があった〉や〈グループ分けされている科目では前半グループの空き時間が多かった〉などがあった。《その他》は2件であった。

(2) 2年次 (図10)

2年次の時間割について、「ある」と回答した割合は2015年度入学生22.5%, 2016年度入学生45.8%, 2017年度入学生42.9%であった。自由記載は17件あり, 《空きコマを詰めてほしい》が6件と一番多かった。次に, 《春学期の時間割が過密》が3件, 《時間割が過密》が3件, 《時間割がわかりにくい》が3件であった。《その他》が2件であった。

(3) 3年次 (図11)

3年次の時間割に問題があるかについて、「ある」と回答した割合は2015年度入学生21.9%, 2016年度入学生23.9%であった。自由記載は10件あり, 《空きコマが多い》が3件, 《他年次と比べ過密》が2件であった。《その他》が5件であった。

(4) 4年次 (図12)

4年次の時間割に問題があるかについて、「ある」と回答した割合は2015年度入学生22.5%であった。自由記載はなかった。

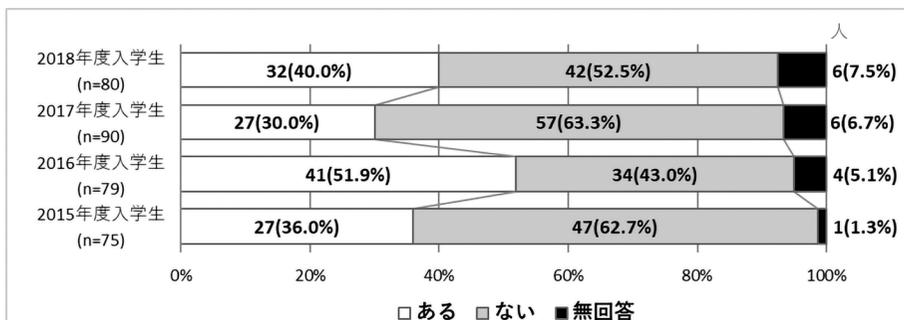


図9. 1年次の時間割に問題があるかについての学生評価

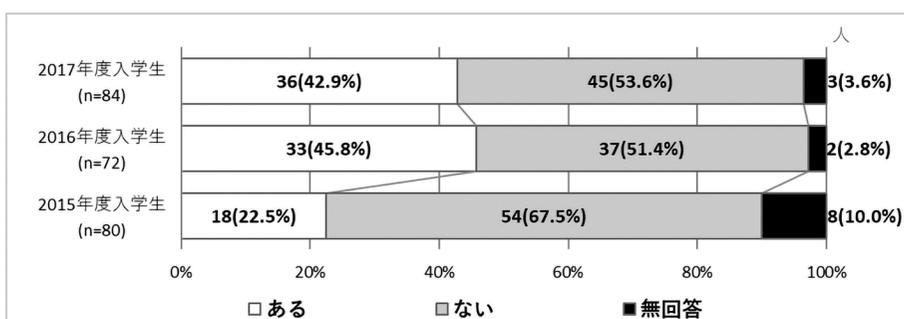


図10. 2年次の時間割に問題があるかについての学生評価

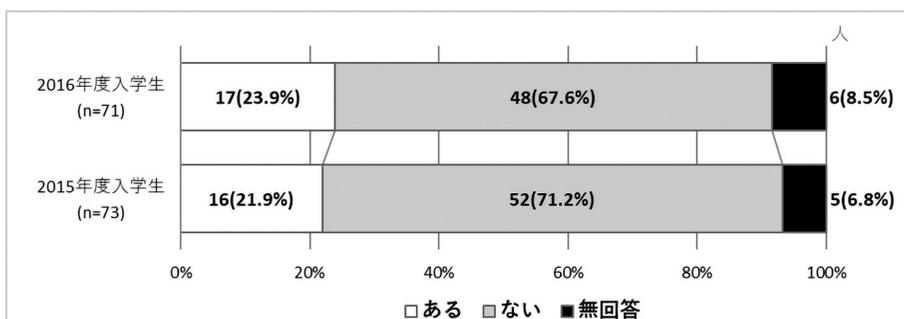


図11. 3年次の時間割に問題があるかについての学生評価

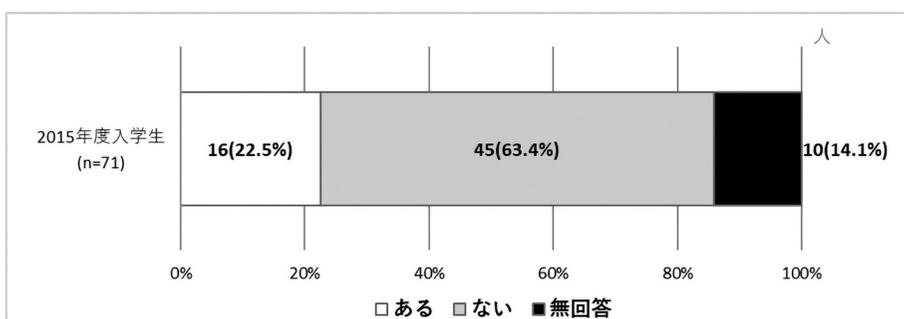
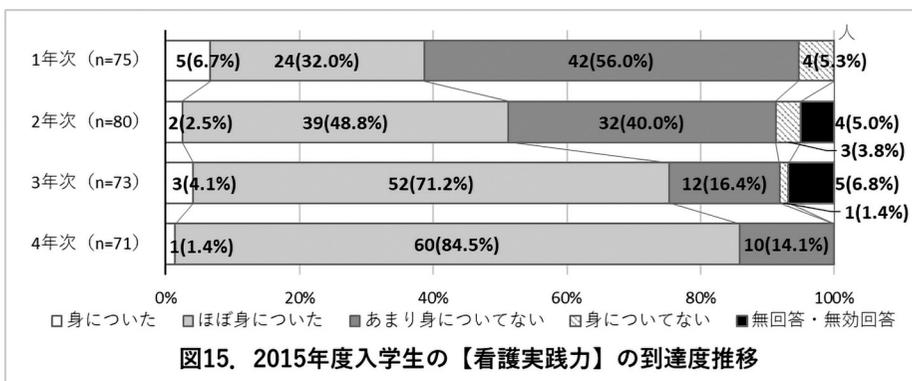
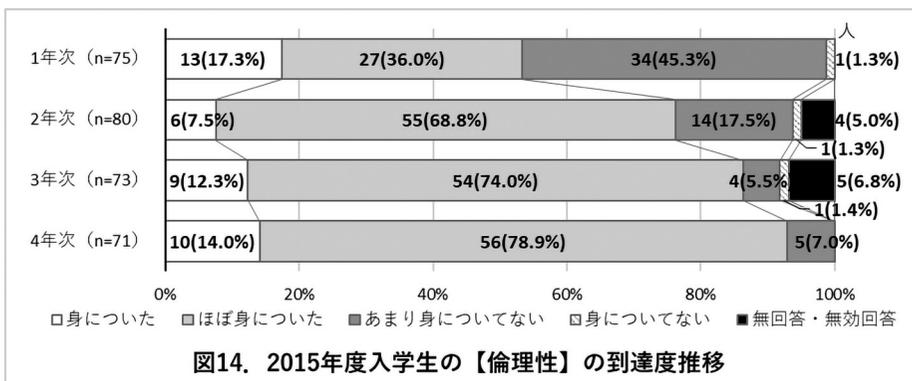
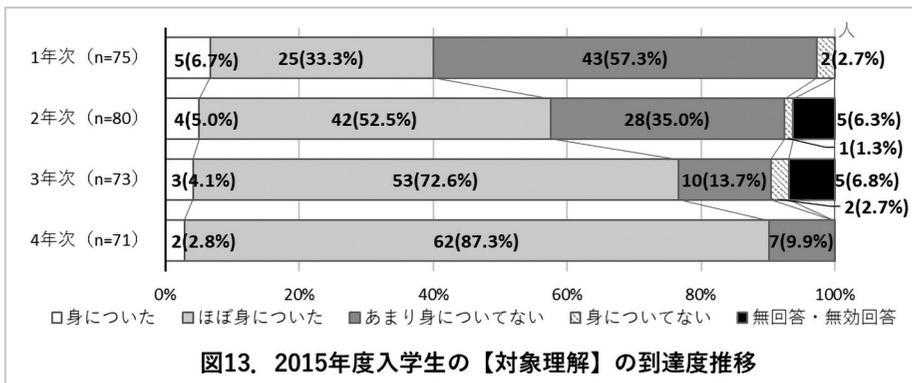


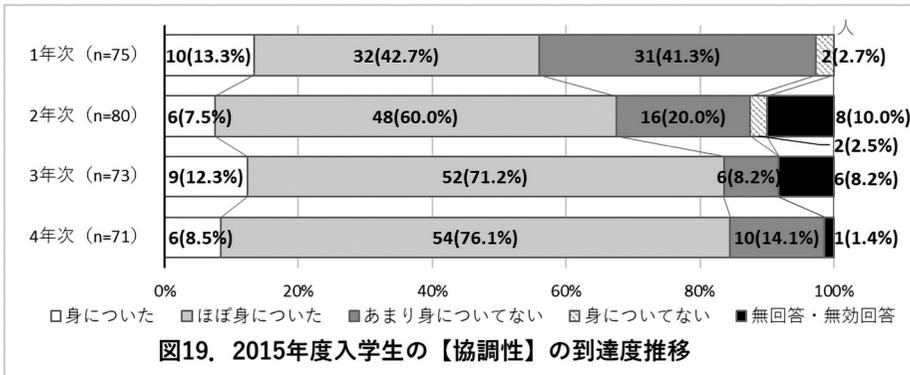
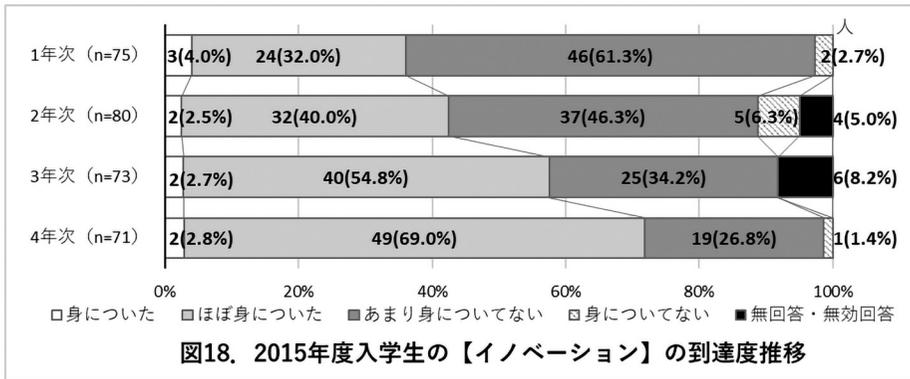
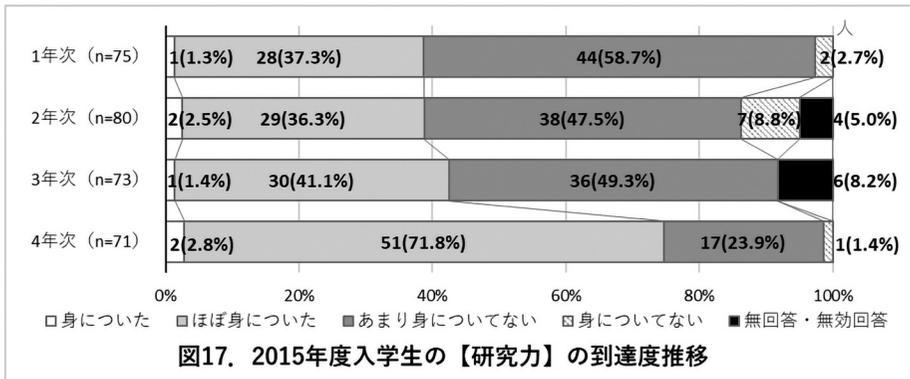
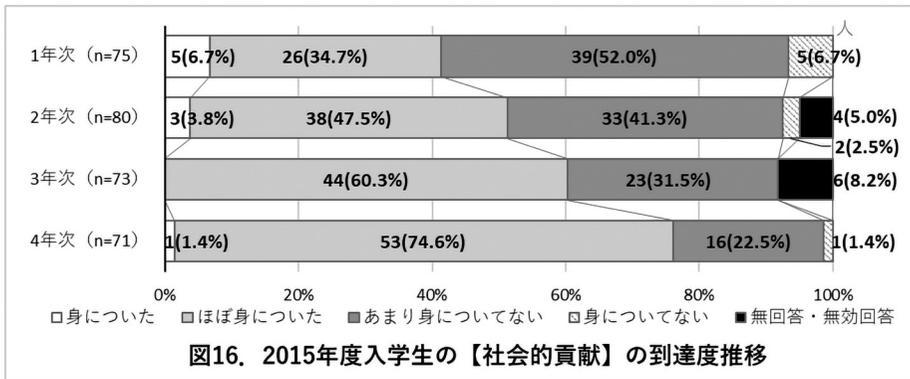
図12. 4年次の時間割に問題があるかについての学生評価

3. 2015年度入学生のDP到達度の年次推移について（図13～19）

2015年度入学生の7つのDPの到達度について年次推移をみると、全てのDPで年次が進むにつれて、「身についた」「ほぼ身についた」を合わせた割合が増加していた。最終的な到達度としては【対象理解】【倫理性】【看護実践力】【協調性】については「身についた」「ほぼ身についた」を合わせた割合が80%を超えていた。一方で、【社会的貢献】は74.6%、【研究力】は71.8%、【イノベーション】は69.0%であり、【イノベーション】が一番低かった。

各年次の傾向として【倫理性】は2年次に伸びる傾向にあり、【看護実践力】は3年次に伸びる傾向にあった。また、【研究力】は4年次に伸びる傾向にあった。





V. 考察

1. 各年次の科目数のバランス、科目の順序性、時間割

1) 科目数のバランス

3年次、4年次では、全ての入学生で科目数のバランスに「改善の余地あり」「やや改善の余地あり」と回答している学生は約1割であったのに対し、1年次、2年次では、どの入学生も約3割と多かった。自由記載の内容をみると、1年次では《秋学期に科目数が多く偏っている》の意見が多く、2年次では《春学期に科目数が多く偏っている》の意見が多かった。これらのことから、4つの年次のなかでも、1年次と2年次における科目数のバランスに課題があり、1年次は秋学期、2年次は春学期に科目数が偏っていると学生が評価したと考えられる。

看護学教育のカリキュラムでは、保健師助産師看護師学校養成所指定規則をふまえ、必ず履修し単位を修得しなければならない必修科目がおかれる。この必修科目の配置により、各年次での履修科目の多くは必然的に決められる。そのため、科目数のバランスを検討するには、まず必修科目の配置について検討することが必要である。科目数のバランスに課題があると考えられる1年次と2年次の必修科目の科目数及び時間数をみると、1年次の必修科目は春学期11科目15単位300時間、秋学期15科目20単位480時間（内実習45時間）である。2年次は春学期18科目23単位420時間、秋学期12科目19単位450時間（内実習180時間）である。2年次秋学期に配置されている実習180時間は、運用上、春学期と秋学期の間に実施がされているため、秋学期の実質の時間数は270時間である。このことから、1年次では秋学期、2年次では春学期に科目数及び時間数が偏っていることは科目配置からも明らかである。

1年次秋学期、2年次春学期に科目が集中する要因には、専門科目において「講義」「演習」「実習」の順序でカリキュラムが編成されていることがあげられる。そのため、実習を履修するまでの時期に「講義」「演習」科目が配置され、実習前までの時期が過密になりやすいと考える。基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習Ⅰは2年次秋学期科目と位置付けているが、運用上は8～9月の時期に実習を行っている。それにより、専門基礎科目や基礎看護学などの専門科目は2年次春学期までに学修できるよう配置されている。そのため、1年次秋学期から2年次春学期までの期間に科目が集中したと考えられる。

また、1年次秋学期と2年次春学期では、専門基礎科目や専門科目の科目数が増え、教育内容は専門性のある内容へ移行する。また、1年次秋学期の科目の順序性についての自由記載では、専門基礎科目である病態と治療に関する科目の順序性について改善が必要という意見がある。そのため、これまでと異なる専門的な内容を理解する学修に負担を感じ、科目数のバランスに偏りがあると回答したことも考えられる。

2) 科目の順序性

2015年のカリキュラム改正時には、以前のカリキュラムでは科目の配分に偏りがあり、学生が学修しやすい科目の順序性や適切な配置がなされていなかったなどの課題があった。それが改善されるよう意識されて改正された（大島ら、2016）。今回、科目の順序性に対す

る学生評価は、1年次から4年次までの、どの入学生も約8割の学生が「よい」「ほぼよい」と回答しており、順序性については学修しやすいと感じていると考えられる。

その一方で、1年次では《病態と治療に関する科目の順序に改善が必要》との意見もあり、科目の順序性については改善の余地がある。病態と治療について学修する科目は、1年次秋学期から2年次春学期までに配置されている。特に1年次秋学期では「からだの構造と機能Ⅱ」や「生化学」、「病態と治療の基礎」が、「病態と治療Ⅰ」と同時期に配置されている。また、専門基礎科目の内容の理解が必要となる「ヘルスアセスメント」も1年次秋学期に配置されている。そのため、順序立てて学修することが困難な学生がいると考えられる。

1～4年次の科目の順序性は学修しやすいものであるが、1年次と2年次の時期においては、より学生の理解が容易にできるよう、科目配置を検討する必要がある。

3) 時間割

時間割について、特に1年次と2年次では、入学生により少し違いはあるが、時間割りに問題を感じていると回答する割合が4割程度になる入学生がみられた。自由記載には、1年次では《空きコマが多い曜日・日がある》《春学期に比べて秋学期の時間割が過密》、2年次では《空きコマを詰めてほしい》《春学期の時間割が過密》の意見が多く挙げられていた。1年次秋学期、2年次春学期では科目数が多いため、過密した時間割となり、反対に1年次春学期、2年次秋学期は余裕がある時間割となるためと考えられる。

また、1年次秋学期、2年次春学期に開講される病態と治療に関する科目は、多数の学外の非常勤講師が担当しており、毎週授業を決まった時限に組み入れることが困難である。そのため、時間割が過密となってしまう週と、時限と時限の空きが多い週ができることもある。さらに、週によって時間割が大きく変わることが、学生の《時間割がわかりにくい》という意見につながると考えられる。この改善のためには、1つの科目を多くの非常勤講師で分担するのではなく、1人の講師が担当する形が望ましい。これにより、決まった時間の講義となり、時間割の複雑さが解消されると考える。

1年次の自由記載では《履修者のグループ分けによる不利益》という意見も挙げられた。基礎科目の一部では学籍番号や学力によって履修者が分割されるため、授業が行われる時間が異なる。そのため、学生によって空き時間が多くなる場合や、時間割により履修できない選択科目が発生すると考えられる。

カリキュラムの科目配置や授業方法により、時間割が複雑になることがあるため、実際のカリキュラム運用方法までふくめて、カリキュラムの内容を検討する必要がある。また、カリキュラム内容がよいものであっても、多くの非常勤講師によって教育を行う場合、時間割の課題だけではなく、教育の質の担保も難しい。そのため、常勤の教員を増やし、カリキュラムの運用を改善することで、教育の質の担保につなげたいと考える。

2. 2015年度入学生DP到達度の年次推移

学生の自己評価によるDP到達度の継続的変化をみると、7項目すべてにおいて、「身についた」「ほぼ身についた」を合わせた回答割合が、学年を重ねるにつれて増加している。また、4年次(卒業時)には、看護を实践するうえで基盤となる【対象理解】【倫理性】【看護実践力】【協調性】について、8割以上の学生が「身についた」もしくは「ほぼ身についた」と評価し、自

己の成長を実感していた。2015年改正カリキュラム全体における教育内容や各科目の単位数、順序性等は、DPで掲げた能力を育成するために、概ね妥当な構成であり、かつカリキュラムが適切に運用されていることを示しているといえる。特に、今回の結果にあるようにDPの到達度が、1年次から4年次にかけて伸びていることを鑑みると、科目配列の順序性は学生の理解を促進するための体系的な配置であったと評価できる。

一方、課題として挙げられたのは、4年次(卒業時)の評価において、【社会的貢献】【研究力】【イノベーション】は「身についた」もしくは「ほぼ身についた」と評価した割合が約7割にとどまった点である。

【研究力】は、「看護にかかわる事象を科学的に探究していくための基礎的な能力」とされており、事象を批判的に捉えることや科学的・論理的に思考する力などが含まれる。この【研究力】は、主に3～4年次に配置された「看護学研究Ⅰ・Ⅱ」での学修を中心に獲得していく。今回の結果でも、「看護学研究Ⅰ・Ⅱ」の履修後に大きく伸びを示していたが、最終的な4年次において、【研究力】が「身についた」と回答した割合は約7割にとどまった。このことから【研究力】をさらに育成するためには、上記の科目だけに依拠せず、1年次から4年間の学修を通して体系的に教授していく必要がある。本学科では、1年次に「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」の科目を置き、大学生として必要な基本的学修技能や論理的思考を身につけるための内容を教授している。このような基礎科目における学修内容を基盤に、専門科目においても探求心や論理的思考などが身につけられるよう、教育内容の充実を図っていく必要があると考える。

また、【社会的貢献】や【イノベーション】については、カリキュラムマップをみると、全科目のうち(保健師選択コース科目、助産師選択コース科目を除く)、【社会的貢献】と強く関連している科目は3科目、【イノベーション】は1科目のみであった。つまり、他のDPと比較して、これらの能力育成のために、直接的な教育内容を担っている科目が少ない。今後は、これらポリシーと関連の強い科目を増やすなど、検討の余地がある。

【社会的貢献】は「変化する社会の中で看護が果たすべき社会的責務を理解し、国際的な視野を含め、広く地域の健康に貢献できる基礎的な能力」とされている。【イノベーション】は「生涯にわたって看護を探究し、創造・革新していくための基礎的な能力を身につけている」とされている。【社会的貢献】も【イノベーション】も、多くの科目に関連する能力である。そのため、現カリキュラムにおける各科目において、これらDPのコンピテンシーをもつ学生の育成を目指した教育内容や教育方法を見直すことも必要である。中央教育審議会の大学教育の質的転換に向けた答申(2012)では、DPに従ったプログラム全体の中で個々の授業科目は能力育成のどの部分を担うかを担当教員が認識し、他の授業科目と連携し関連し合いながら組織的に教育を展開することが述べられている。このように、教授者は、その科目の目標や教育内容を構築する段階で、DPとの関連を意識し、より具現化して教授していく必要がある。

また、本学科の臨地実習は、そのほとんどが病院で行われている現状があり、様々な場や状況において、広く求められる看護の役割を体験的に学修できる科目が少ない。今後は、学修の場を広げ、地域で様々な状況の人々に対する看護実践を通して、【社会的貢献】における基礎的な能力の育成に向け、さらなる教育の充実を図る必要があると考える。

以上の内容から、学生にとってカリキュラム全体の科目の順序性、バランス及び運用方法は、

DP に到達したという満足度がえられるものであったと考えられる。

しかし、一部の科目数及び時間数のバランスとカリキュラムの運用方法に検討が必要であることが明確となった。また、DP のなかでも到達しにくい項目があることも明確となり、各科目における教育内容の見直し等が必要である。

2015 年のカリキュラム改正時には、新たなカリキュラムデザインまで検討することは負担が大きいため、教科型で積み上げ型、さらに一部統合のカリキュラムデザインとした（大島ら，2016）。今回の分析から、明らかになった課題を改善するためには、カリキュラムの内容にあわせて、カリキュラムデザインを自由に駆使し、目指す方向にむかうことのできるカリキュラムを検討する必要があると考える。

3. 本報告の限界と今後の課題

今回、カリキュラムの運用については、各年次での科目数のバランス、科目の順序性、時間割について、学生の評価結果から課題を明らかにすることができた。しかし、科目数のバランスや科目の順序性については、各年次での内容だけではなく、カリキュラム全体としてみた場合の内容についても評価する必要がある。今後は、4 年次終了時に 4 年間で振り返り、カリキュラム全体の科目数のバランス、科目の順序性について評価を受けることも必要と考える。

DP 到達度については、学生による自己評価を毎年実施してきた。この取り組みは学生にとっても、1 年間の学びを DP に照らし合わせて振り返ることで、自身の努力や成長を自覚する機会になり、その後の学修促進の一助になったと考える。しかし、本報告における DP の到達度は、あくまで学生の主観にもとづく評価である。そのため、DP が包含する意味の捉え方などには学生間で差があったことが推測され、結果の比較には限界がある。今後は、結果の妥当性を担保するため、用語の定義を示すことやルーブリック等を用いて、各 DP が示す具体的なアウトカムとその評価の基準を明確にしたうえで調査を実施する必要がある。また、DP の到達度評価には、学生による主観的評価に加え、客観的な方法も用いて、多角的に評価していくことも必要であると考えられる。

なお、DP 到達度の経年推移の結果には、2015 年度カリキュラム以前のカリキュラムに則った留年生数名の回答も含まれる。そのため、2015 年度生のみ結果を正確に示しているとはいえない。今後は、対象となる学生の選定に十分留意し、結果を示していく必要がある。

謝辞

本報告にご協力いただきました本学科の学生、及び教員の皆様に感謝申し上げます。

アンケート実施に際し、アンケート作成、集計、分析を行っていただいた、下記の看護学科教務委員の先生方に感謝申し上げます。

・2015 年度教務委員

蒔田寛子、永井道子、永井邦芳、山根友絵、山口直己、松本尚子、廣瀬允美

・2016 年度教務委員

蒔田寛子、永井邦芳、大野裕美、山根友絵、押本由美、廣瀬允美、安藤眞理子、西澤和義

・ 2017・2018 年度教務委員

蒔田寛子，藤井徹也，大野裕美，中島怜子，五十嵐慎治，堀元美紗子，西澤和義

・ 2019 年度教務委員

蒔田寛子，大野裕美，中島怜子，堀元美紗子，為永義憲，西澤和義

本報告は 2019 年度教務委員が担当し作成した（報告主担当：西澤和義）

引用文献

中央教育審議会（2012）. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）.

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf.
（閲覧日 2019.10.27）.

大学改革支援・学位授与機構（2017）. 教育の内部質保証に関するガイドライン.

https://www.niad.ac.jp/n_shuppan/project/_icsFiles/afieldfile/2017/06/08/guideline.pdf（閲覧日 2019.11.27）.

五十嵐慎治，大島弓子，古賀節子他（2017）. 2015 年度卒業生によるカリキュラム評価——看護系大学生の卒業時の不安に焦点をあてて——. 豊橋創造大学紀要，21,91-99.

厚生労働省（2019）. 看護基礎教育検討会報告書.

<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（閲覧日 2019.10.27）.

蒔田寛子，大島弓子，永井邦芳他（2018）. アセスメントポリシー策定にむけた看護学科の取り組み——看護学教育の包括的評価として——. 豊橋創造大学紀要，22,45-47.

蒔田寛子，大島弓子，山口直己他（2017）. 2015 年度カリキュラム評価の現状と課題——学生・教員からの評価に焦点をあてて——. 豊橋創造大学紀要，21,119-141.

文部科学省（2017）. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
（閲覧日 2019.11.19）.

文部科学省（2019）. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会について

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2019/05/27/1417062_1.pdf
（閲覧日 2019.11.27）.

大島弓子，五十嵐慎治，古賀節子他（2016）. カリキュラム改正の検討過程とその成果. 豊橋創造大学紀要，20,47-65.

田島圭子（2009）. 看護学教育評価の基礎と実際 看護実践能力育成の充実に向けて 第 2 版. 医学書院.

